

生活に寄り添う見守り

「歩かんと、歩けんくなるさね」と毎朝のどかな住宅地を散歩する高崎アキノさん(92歳・伊方)。地域の見守りに支えられ、今日も和やかな笑みを浮かべます。夫を亡くし、女手一つで5人の子を育てたアキノさん。昨年からは認知症の薬を飲み始め、末娘の恵子さんが毎日通いながら寝泊まりして、生活をサポートしています。

「私が帰る際に『何か悪いこと言ったかね、言ったらごめんね』と母が涙することも。その度『産んでくれて、お世話させてくれてありがとう』って心から伝えます」と恵子さん。互いに思いを伝え合う大切さを実感しています。

アキノさんが住む鶴ヶ丘地区では、普段から声を掛け合う見守り活動が活発。区長・民生委員・福祉委員が同居老人宅を毎週訪問し、つながりを育んでいます。

「よう知った所で暮らすのが一番

ありがたい」と鶴ヶ丘を元気に歩くアキノさん。地域に見守られる安心感が、毎日の生活に寄り添っています。

日頃の感謝を伝えるアキノさんに「娘だから当たり前よ」と涙した恵子さん。



鶴ヶ丘民生委員 佐藤 洋征さん

高崎さんはもちろん、地域のかたとのあいさつは欠かせません。日ごろからつながりを作ることで、空き巣や詐欺などの情報も共有でき、防犯対策にも役立っています。



鶴ヶ丘区長 丸山 勇吉さん

誰もが安心して暮らせる地域を目指して、一人暮らし高齢者の家の見回りを実施しています。高崎さんもそのうちの一人。みなさんから「ホッとする」と喜ばれていますよ。



住みたい地域で住み続けられる つながりの輪

町の高齢化率は25.8%で4人に1人が高齢者、約5軒に1軒が高齢者の一人暮らし世帯です。障がい者や乳幼児などを合わせる、災害時に何らかの支援が必要となる人はおよそ5人に1人。さらにもその数は今後増え続けます。とても一部の人だけで対応できない今、より多くの人が地域で支え合うネットワークが求められます。

そのための仕組みづくりを提案し、行動につなげる町の取り組みが、本年度から始動した「地域支え合い体制づくり事業」です。この事業で、日常の見守りや災害時の支援が必要な人が地域内にどれだけいるかを把握し、地域で支え合える備えや対応が進められます。同時に、認知症と予防法の知識を得たり、危険箇所や防犯箇所を確認しながら、地域の福祉力向上につなげていきます。

地域支え合い体制づくり事業



地域力が心支える支柱になる 一人ひとりがその主役です

隣 人を知らないなど、かつては考えられなかったこと。しかし今、全国的に親身に助け合える環境が激減しています。私は安心してゆとりある生活を送るには「心の支え」が欠かせないと思っています。地域で見守り、気にかけるつながりや支え合いが身近にあれば、どれだけ「心の支え」になることか。町では、そんな「住みたい地域で住み続けられる活動」に本年度から取り組み、来年度以降もその輪を広げていく予定です。

心つながる地域という存在は、まちを作っていく上での最も大きな基礎です。この基盤がなければ、真の意味でのまちづくりはできません。今回の東日本大震災でも示されたように、緊急時に最も力を発揮するのは地域です。

その地域づくりの主役は住民のみならず一人ひとりであり、町はその仕組みづくりをしっかりと支えています。



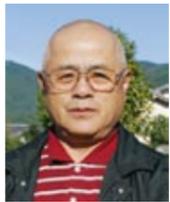
福智町 浦田 弘二 町長

未来へつながる一歩

「人は一人では生きていけないのだから」と、地域で活動参加を呼びかける持丸勝利さん(弁城)。昔ながらの共助の大切さを目を向け、地域内で話し合っってモデル地区に手を挙げました。持丸さんは「いろんな立場や世代が協力すれば、誰もが安心して暮らせる地域になるはず」と期待しています。

一人の活動は限界のある小さなもの。しかし例え小さくても、支援が必要な時に差し伸べられる身近な手は、とても大きな存在です。それが地域へと広がれば、さらに大きな心の支えとなります。

「時間や余裕が無い」「自分のことで精一杯」そんな心で過



弁城新町区長 持丸 勝利さん

ごしがちな現代。そこで足を止め「命」や「生活」という深い視点で地域を見つめてみると、その関わり方も変わってくるのではないのでしょうか。一人ひとりが一歩踏み出せば地域は変わる。いずれ自分に返ってくる。少しの歩み寄りが大きな輪へと広がります。時間がかかっても、まずは一歩ずつ。現状と向き合い、知ることが、見守りや支え合いという行動に表れ、やがて生活の一部へとつながっていきます。



「ここは優しい人たちばかり、みんなようしてくれる」とアキノさん(中央)。「声掛けのうれしさが分かるから、私も地域の高齢者に声を掛けています」と恵子さん(左)。「アキノさんは地域の最高齢者、いつまでも長生きして」と民生委員の佐藤さん(右)。